

数字の言葉

永井さんのこのごろの悩みは、自分の体調と小三の三男のこと。

十歳の男の子は、日常の言葉をすべて数字にしたいと夢見ている。

〇一四一は「おいしい」

三五一〇は「みごと」

と変換し、言葉が作れると、自慢げに見せる。

暗証番号等の数字を忘れないように、日本語に変換しておく以前からある発想なのだが、三男にとつては、新大陸を発見したかのような喜びようで、一日そればかり考えている。

当人の話をよく聞くと、数字を言葉に変えるのではなく、日本語自体を数字にしたいらしい。

日本語もまだ怪しい小学生から、当人の大それた願いを聞きだし、理解するまでに、永井さんは日曜の午前中を費やした。

話を聞かなければ、家族も迷惑をかけられ始めていたからだった。

家族間のメモは冷蔵庫に貼ってある。

「明日、お弁当いります 隼人」

「水曜日は飲み会 父」

に交じって数字だけのメモがあると、理解するのに

手間がかかる。

妹にいたずらをして泣かせ、「それっていいことじゃないでしょ」といたずらを叱ると、「一一五一一〇」と目を輝かせてメモ帳に書いてくる。

〇一〇三はお父さん

ハ八一〇はお兄ちゃんの名前 隼人

犬のトムは一〇六

まだ、「お母さん」は考え付かないらしい。

家族から、三男は「ちび」と呼ばれているが、その言葉もまだ、数字化されていない。

実を言うと、永井さんにとって、ちびのことより、自分の体調の悪さのほうが深刻な悩みだ。

病院に行っても「そのくらいなら大丈夫ですよ」と言われ、励まされているのか、突き放されたのか、わからない。

早朝の弁当作りから始まる食事作りと、多量の洗濯物、四人も子どもがいることで、学校行事等も多いことからの疲れなのか、それとも更年期障害なのか、医者も明確にはしてくれなかった。

高校生と中学生の子どもたちには、母親の体調の悪さを訴えてはいるものの、今一つ効果はうすい。たしかに、母親の体調よりは、部活の成績と、クラスで気になっている女の子のしぐさのほうが、気にな

るのは当然だった。

ちびは、授業のノートをすべて数字でとろうと努力しているらしい。

あまりに汚い漢字練習帳を見ても、永井さんは怒る気持ちが見えなくてくる。

三男でよかった。

これが長男だったら、眠れなくなるほど心配していることだろう。

今は、疲れているのに寝つきが悪く、なんだか体がきつくて、その時だけは三男のことなど忘れていく。

逆に言えば、長男のときはそれだけ自分も元気だった。

「お宅はお子さんがたくさんで、ゆったりとお育ちになって」と言われるが、自分の更年期の心配のほうは、小三の子どもの生活ぶりより大切なだけなのだ。

「お父さんの暗証番号を考えておいてくれないか。近頃は携帯もパソコンも暗証番号ばかりで困っているんだよ」

と夫は呑気に三男にいう。

「お父さんはおぼえるのがもう得意じゃないから、

ひとつのお話にして、それを数字にすれば、いろいろな暗証番号も分かりやすいよね」と三男は言い、まじめに取り組んでいるのだ。

あの子はイソップ童話でも作る気んでいるらしい。それも、全部数字で。

こんなことでもいいのだろうか、永井さんはまた少し心配になる。

「それはたいへんだわね」

お隣の中島さんのおばあちゃんは、同情してくれました。

三男のことなのか、永井さんの頭痛のことなのかは、わからない。

第三日曜日に行われる、町会の公園清掃は六時半から始まる。

夏と冬は、ふだんでも少ない参加者が、一層減る。今朝はなんと、中島さんと永井さんのふたりだった。

「今日はふたりだから、ここの草むしりだけにしましょう」

と、中島さんはてきぱきと仕事を決める。

中島さんは子どもたちと親しい。

十五年前に引っ越してきた時は、永井さん夫婦と長男だけだった。

それが、あと三人も生まれてしまった。

三男などは、中島さんのお宅でおやつまでごちそうになっている。

末っ子の長女は、今も中島さんと仲良しだ。

親に叱られた時は、いつも中島さんの庭で遊んでいる始末だ。

「けいちゃんも、そんなになったのね。近頃見ないと思っていたけど」

「まあ、私もそんなには心配していないんですけど。」

それでも、呑気になり過ぎているんじゃないかと、ちよつと自分を反省している

永井さんはそう言いながら、鉄棒の下に生えている草をむしる。

家から草取り専用の道具を持参したから、取りやすい。

一度、土を掘り起こして、草をむしる。

中島さんは、横で、立っている。

時々、永井さんが抜いた草を袋に入れる。

もう草取りは疲れたらしい。

「今度私も頼もうかしら」

「そんなことしたら、あの子、ますます図に乗りますよ」

そう言いながらも、永井さんはちびのことをしゃべっただけで気がすんだようにも思えてくる。

子どもが怪我をし、熱を出し、その度ごとに親は心配して日が過ぎていく。

子どもを注意し、親は怒鳴り、はたから見たら、親も子も何をしているのかと思うような行動だ。

子育てなどというが、毎日ご飯を食べさせ、風呂にいれ、寝かせただけかもしれない。

そんなことを繰り返し、もうすぐ二十年になる。

親が向上したとは思えないが、燃料切れになってきたことだけは確かだ。

そんなことを中島さんにぼやいたら、「あたしはもう燃やす場所に行く年よ」と笑われた。

家に帰ると、メモがあった。

八八八三五一〇と書いてある。

「母は見事」かしら。

しばらく眺めてから、永井さんは呟く。

ちびの「なんでもデジタル」にすっかり付き合っている自分に気付いていない。